

一 次の文を読んで、後の問いに答えよ。(60点)

〔近代化〕はヨーロッパの主導によって進められたというよりも、しばしば植民地支配を免れたり、レイゾク^①的地位から脱したりする方途として、広く非ヨーロッパ地域に現れた現象^Aだと言えるだろうが、そのヨーロッパからの自立の方途が、実は世界のヨーロッパ化を最終的に決定づけることになった。というのも〔近代化〕というかたちでの諸地域の変貌^{へんぼう}は、ヨーロッパ的な世界システムへの統合をめざすものであり、それこそが語のまったき意味でのヨーロッパ化に他^{ほか}ならなかったからだ。そしてこの世界的な〔近代化〕の傾向を生み出すことによって、ヨーロッパの世界化は、世界のヨーロッパ化として完成することになった。その結果われわれの生きている世界は、ヨーロッパによって鑄造されたとは言わないまでも、ヨーロッパによって触発され、ヨーロッパが生み出した組織条件に適応すべく編成された世界になったのである。だから世界の〔現在〕を考えると、これは、〔ヨーロッパ〕という名の下に展開された〔世界史〕の運動を考えることでもある。

それはまったく自明のことのようにも思われるし、また同時にヨーロッパを絶対化した見方のようにも思われる。ただ、自明性は往々にしてありうべき問いを封殺し、思考をあらかじめ方向づけてしまう。だから何かを考えると、当り前のこととして受容され問われることのない自明なものを点検してみなければならぬ。ただ、それはある事象の自明性をクツガエすためではなく、自明なものが自明である所以^{ゆえん}を問い質^たし、そこに封殺されている別の思考の可能性を探り出すためである。

またこの場合、過不足なく事態を検討するためには、一度は〔ヨーロッパ〕を絶対化してみる必要もある。というのも、〔ヨーロッパ〕だけが歴史上唯一の文明的主体として、〔絶対〕とそして〔普遍〕を演じてきたからだ。そのことはたとえば、世界のあらゆる地域を見渡して、ヨーロッパだけがみずから命名したということを想起してみればよい。ヨーロッパのある個人の「勲」を記念してつけた「新大陸」アメリカは言うに及ばず、アジア、アフリカ、オセアニアといった名はすべて、そう呼ばれる地域にもともとあったものではなく、ヨーロッパによって命名され、命名されることによってこれらの地域は、ヨーロッパ的な世界意

識のなかで「存在」へとシヨウカクしたのである。だとしたらたとえば「アジアの自己主張」といったものがあるとして」とは、
いっただいどういうことになるのだろう。アジアはヨーロッパの視野が広まるにつれ、しだいに東方に向けて奥行きをもつようになり、ついに太平洋岸まで到達した。それはヨーロッパにとってのアジアなのである。では、自分で選んだものでもない名のもとに自己を定めるアジアの「自己主張」とは何なのだろう。自己の主張がすでに他者の規定の補強でしかないというこのジレンマは、あらゆる「東洋主義」や「アジア主義」を自縄自縛に陥れたものであり、このジレンマを免れているのは、他の誰にも名づけられることなく、みずからの名乗りによってパフォーマティヴに自己を設定したヨーロッパだけなのである。たしかにアジアやアフリカは「非ヨーロッパ」を標榜して、それに対抗する姿勢をとることもできるが、それでもその対抗や自立の仕種が、ヨーロッパによってひとつになった世界の中での振舞いではないということとは否定できない。

一九四八年に上梓されたレオポルド・セダール・サンゴール編『ネグロ・マダガスカル新詩選』に寄せたシャルル・リアンドレ・ジュリアンの序文に次のような一節を読むことができる。

(……)植民地支配が終り、アフリカは解放され、歴史上のいかなる革命にも見られなかったほどの変化が起こった。熱狂と失意、希望と怨恨を刻印された新しい自由の経験は、当然ながら詩にその表現を見いだすことになる。

この一節がいま読む者をはっとさせるのは、それがすでに四半世紀来忘れ去られたブラック・アフリカの新しい詩の勃興の意味を鮮明に思い出させるからではなく、まさしくその意味を要約した「新しい自由の経験」という言葉のためである。

たしかに「解放」された旧植民地の人びとにとって「自由」は新しく、しかもまったく「新し」かったことだろう。というのも、彼らにはかつて一度も「自由」の経験などなかったのだから。その地に「ヨーロッパ」が訪れ、この「文明の中心」に鎖で繋がれる以前には、彼らには彼らなりの自在さがあつたとしても、「自由」など必要なかつたことだろう。彼らはいわば自生していたの

であり、「独立」を主張する必要も「解放」される必要もなかったはずだ。植民地支配によってこれらの地域は、輝かしい発展を謳歌する西洋近代の黒いエクス・マキーナとして、その「進歩と繁栄」に繫縛されサクシユされ、まさにそのために「独立」や「解放」を必要とするようになったのだ。とはいえ彼らは独立によってけつして「解放」されたわけではない。なぜなら「独立」とは、すでに不可逆的に進行している西洋的歴史のなかで一主体としての承認を求めることであり、彼らが「解放」される空間は、すでに西洋化した世界空間なのだから。そこに「主体」として参入するために、彼らは結局あらためて「西洋システム」という学校に入り、それこそ未知の「自由」を学ばなければならなかったのだ。そのことが現在の世界のいわば既決性というものを端的に示している。

ヨーロッパは世界化し、世界はヨーロッパ化した。というより、この世界はヨーロッパによって「世界」として形成された。そしてヨーロッパは自己の普遍性の主張を、形成された「世界」の内に実現することになった。ただ、この普遍性の実現が全体としての「世界の形成として」^⑤ジウジュしたのは、この世界が地球という球体の表面にあるという単純な物理的条件に規定されている、ということには注意しておいてよい。でなければ、普遍性の主張が全体化ということはありえない。どんなにヨーロッパが膨張しても、それが無限の平面上のことだったら、その普遍性の主張も有限な領域に甘んじるひとつの普遍性にすぎず、膨張の前線の向こうにはつねに未知で手つかずの圏域が広がっているからだ。その外部が、膨張するもの自身をつねに個別性へと送り返す。ただ地球が丸いということが、前線の解消と全体化を可能にするのだ。ヨーロッパはそのようにして全体となった。

だがすべてがヨーロッパ化されてしまったとしたら？ ヨーロッパが拡張を続けている間は、つまり同化する外部をもつ間は、ヨーロッパは有限な、したがって固有性をもつものでありえた。ただその境界がなくなり、すべてがヨーロッパ化されて全体がヨーロッパ的になってしまうと、ヨーロッパはもはやその固有性を主張しえなくなる。あらゆる差異を超える共通項、全体の全体性たる所以をなすものは、この全体の内でいかなる固有性もたない所与の条件である。いまヨーロッパはそのような世

界の全体性の自明の条件になってしまった。だからこそ、世界のどこにいても「世紀末」を語って何の違和感もないのである。「西暦」は依然としてこの世界の世界性形成の刻印だとしても、もはや個別ヨーロッパへの帰属という意味を失ってしまった。そして実はそれが現在の状況の象徴的な反映なのである。だからいま「歴史の終り」が語られるとしても何の不思議もない。たしかに歴史は終ったとも言える。だがその「終った歴史」とは、歴史一般ではなく西洋を主体とする世界化の歴史なのである。
(西谷修『世界史の臨界』による。ただし問題作成の上から本文の一部を改めた。)

〔注〕 パフォーマティヴ……遂行的。

エクス・マキーナ……「機械仕掛けの存在」の意。

問1 傍線部A「ヨーロッパからの自立の方途が、実は世界のヨーロッパ化を最終的に決定づけることになった」とあるが、そうなるのはなぜか、その理由を六十字以内で述べよ。

問2 傍線部B「自明性は往々にしてありうべき問いを封殺し」とあるが、そうなるのはなぜか、その理由を簡潔に述べよ。

問3 傍線部C「だとしたらたとえば「アジアの自己主張」といったものがある」とは、いったいどういうことになるのだろうか、著者は、それが「どうということになる」と考えているか、簡潔に述べよ。

問4 傍線部D「彼らにはかつて一度も「自由」の経験などなかった」とあるが、それはなぜか、その理由を簡潔に述べよ。

問5 傍線部E「現在の世界のいわば既決性」とあるが、具体的にはどういうことか、七十字以内で述べよ。

問 6 傍線部F「だからいま「歴史の終り」が語られるとしても何の不思議もない」とあるが、なぜ「何の不思議もない」のか、その理由を簡潔に述べよ。

問 7 傍線部①～⑤のカタカナを漢字になおせ。

- ① レイゾク
- ② クツガエス
- ③ ショウカク
- ④ サクシュ
- ⑤ ジョウジユ